

令和3年7月15日（木）中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会
議題（1）についての意見

福井県福井市至民中学校校長 小林 真由美

本日のご発表の中にあつた「探究科」のような取組は、総合的な学習の時間がスタートした当時、中学校でもさかんに行われてきました。ところが、子どもにとってこの時間の目的が理解されず「好きなことを好きなようにやる」という間違つたテーマ設定への支援に、先生方が限界を感じ、荒れにつながる時間になっていきそうな状況が見えてきた頃に、このように各自のテーマを探究する形は徐々になくなっていきました。本日の議論の中にあつたように、この取組を高校教育全体に広げていくためには、こうした状況に陥らないよう十分な理解が必要であるように思います。

しかしながら、コロナ禍にあつて、本校では昨年度、総合的な学習の時間を中心に行ったカリキュラム・マネジメントが功を奏したので、お伝えしたいと思います。

本校ではSDGsのような取組を総合的な学習の時間に行っていました。しかし、昨年度のコロナによる休校を経て、やむなく総合的な学習の時間のテーマを急遽「感染症対策を通して社会と関わる」と変更して、取り組むことにしました。クラスルールを定めたり、新聞記事等で情報収集をしたり、さらに、教科の時間とつなげて、美術では「ソーシャルディスタンスの足形マークを作って地域の店に届ける」、音楽では「ギター演奏で自分たちの音楽を発信して人の心を癒す」、家庭科では「機能的なマスクを作る」など初めての試みにチャレンジしました。時期も時期だったので、世の中にはたくさんの情報の材料がありましたし、生徒にとっても世の中にとっても、本気で探究せねばならないテーマであつたことから、例年のない成果を得ることができました。世の中の関心も高く、社会へ発信する機会がたくさんあり、それによる評価もよい励みになりました。まさに大島先生が会議の中でおっしゃられた「社会的課題を自分事として」とらえることができた結果だと思っています。

私たちは昨年度の取組を通して、こうした教科等横断的な取組を進めるには、まず、生徒自身に問いを起こさせること、つまりは、今の社会で大人も答えがわからずさまよっていることを「自分がなんとかしてやろう」という必然性を、上手に引き出すことではないかと思っています。その上で、探究した結果をどのように社会に出していくか、自分が探究したことによって、より多くの人たちの役に立つのかを実感させていくことではないかと思っています。もしかしたら、コロナ禍で多くの人たちが困っている今こそ、探究すべき材料があるのかもしれない。

こうしたことを経て、今年度からはSDGsはやめて、「本気のキャリア教育！」というテーマを進めています。10年後の未来が決して安泰ではないという危機感が、生徒の本気を引き出しているように思っています。生徒にとって自分の将来は何よりもの大きな関心事なのです。まだまだ稚拙な取組ですが、何かの参考になればと紹介させていただきました。